

カンボジアスタディツアーを通して

八戸聖ウルスラ学院高等学校

Takahiro Y.

【応募動機】

私には、国や人種などに関係なく、すべての子どもたちが平等に教育を受けられる社会を作りたいという夢があります。中学校のときに受けた授業で、世界には教育を受けられない子どもたちや受けられなかった大人が大勢いることを知って胸が苦しくなり、このことをきっかけに教育格差や国際的な不平等について関心を持ちました。このような経験、およびカンボジアの政治の影響で生まれた課題が現代の教育にどのような影響を及ぼしているかなどの現実を自分の目で見て、教育が果たす役割の大きさを肌で感じたいと思ったことから、私はすべての子どもが平等に教育を受けられる社会を作るための第一歩として本スタディツアーへの参加を志しました。

【教育について】

○カンボジアの教育制度

カンボジアの教育制度は、0~5 歳までの就学前教育、6~14 歳までの義務教育（初等・前期中等教育）、15~17 歳までの後期中等教育、18~23 歳までの高等教育（大学・職業訓練校など）に分かれています。また、公立の小学校・中学校・高等学校では、教員不足の影響もあり、午前と午後の二部制で授業が行われています。

○寺子屋

寺子屋は、日本ユネスコ協会連盟が支援しており、公立の学校とは異なる独自のプログラムが多くあります。識字クラス、小学校クラス、中学校クラスといった教育プログラムのほか、収入向上プログラムなどがあります。寺子屋には、勉強道具や学費を払うお金がなかったり、労働力として日々仕事をしていたりする子どもたちが多く通っています。寺子屋は、そのような子どもたちの都合が良いときに通えるように工夫がなされています。また、オンラインで授業を受けることができるクラスもあり、そのために用いるインターネット環境や電子機器なども提供しています。加えて、文房具やノートなどの勉強道具、通学に用いる自転車、制服、月 2 回の給食なども無償で提供されています。更に、寺子屋は学びの場であるだけでなく、公民館のような役割も担い、お正月や会議などでも使われています。

○大人の識字クラス

このクラスでは性別や年齢に関係なく勉強することができます。私が訪問した際には、夜間にもかかわらず大勢の方が、歌を歌いながら大きな声を出して一生懸命学んでいました。教室には、小学校や中学校の教科書がありました。大人になっても熱心に勉強する人たちを目の当たりにして、挑戦することに年齢は関係ないことを実感しました。



一生懸命学ぶ大人たちの様子

○寺子屋での活動・自宅訪問

カンボジアには日本ユネスコ協会連盟の支援を通して、23軒の寺子屋が設置されています。今回、私たちは今年開講されたばかりの「チュブタトラウ寺子屋」に訪問しました。私たちは、子どもたちと折り紙やジェスチャーゲーム、カンボジアの遊びなどで交流しました。その後、寺子屋に通っている、両親のいない13歳の女の子の家を訪問しました。彼女は学校で使う教科書や文房具が買えず学校をやめてしまいました。しかし、彼女は勉強が好きで整備されていない凸凹の道を自転車で30分以上かけて寺子屋に通っています。彼女の姉兄は、彼女のために一生懸命働いています。彼らとの交流から、苦しいながらも互いに支えあい、楽しい生活を送っていることがわかり、ずっと心が沈んでいるというわけではないということを彼女の自宅に訪問して理解することができました。



チュブタトラウ寺子屋の小学校クラスの様子



学習者の自宅

～感想～

カンボジアは、教育面で多くの課題を抱えています。例えば、教員不足のため、授業を二部制に分けざるを得ず、結果としてお金持ちの子どもは午前には学校へ行き、午後は英会話スクールに行くなどしているという話を聞いて、そこでも貧富の差が生まれているということを実感しました。多くの生徒が高等教育まで修了することができず初等教育・中等教育で学習を終えたり、中退したりしています。また私は、カンボジアの学校に通っているのは女の子の方が多いと聞いて驚きました。その理由として、男の子は女の子よりも力があるため労働力として長時間、外に働きに出ることが多く、結果的に家事を担当することが多い女の子の方が学校に通いやすいという事実を知りました。また、寺子屋で交流した子どもたちの中には、私たちと歳が近いのに背が低く痩せていた子もたくさんいて、私たちがどれだけ恵まれた環境で育っているのかを深く理解させられました。

一方で、私が寺子屋の見学や子どもたちとの交流から感じたことは、とにかく子どもたちが明るくて楽しそうだったことです。私たちが寺子屋に到着してすぐ、元気で大きな声が聞こえてきました。いざ教室の中に入ってみると、子どもたちが集中して授業を受けていました。その熱心さは、彼らは貧しいから悲しい雰囲気があるのだろう、という私の先入観を無くしてくれました。授業の見学後には、とても楽しそうに折り紙を作ってくれ手裏剣や紙風船と一緒に遊びました。私が声をかける前に子どもたちの方から話しかけてくれたり、一緒に話をしたりなど充実した寺子屋訪問でした。



カンボジアの遊びで盛り上がった



寺子屋の子どもたちと充実した時間を過ごした

【医療について】

私たちは、医療の現状について学ぶため、アンコール小児病院（Angkor Hospital for Children）を訪問しました。この病院は、日本人カメラマンの井津建郎さんによって1999年2月22日に設立されました。ここでは、3人の医師と10人の看護師が働いています。私が感じたこの病院の特徴は主に4つあります。1つ目は部屋の名前が数字やアルファベットではなく、果物の名前になっている点です。部屋の名前として、誰でも理解できるようにバナナやマンゴーなどが付けられており、訪問中の放送でも果物の名前が呼ばれていました。2つ目は無料で診察を受けることができる点です。政府が発行する、貧困を証明するIDを持っていれば無料で診察を受けることができます。3つ目は歯磨きの仕方や調理の仕方を学べる点です。私たちの訪問中にも歯磨き指導が行われていました。また、この病院に設置されたキッチンでは、乳児が食べる離乳食などの作り方を学ぶことができます。4つ目は病院の中に遊具や畑がある点です。子どもたちが病院でリラックスできるように設置された遊具では、実際に多くの子どもたちが遊んでいました。



離乳食づくりなどを学ぶための広いキッチン



職員の方たちとの記念写真

【歴史について】

かつて、カンボジアはアンコール王朝のもとで大きく栄え、アンコールワットなどの寺院を残しました。しかしその後、国は衰退し、周辺国の影響を受けていきました。19 世紀にフランスの植民地となりましたが、1953 年に独立するも、内戦やクメール・ルージュの抑圧による悲しい時代を経験しました。しかし、その後国際社会の支えで平和を取り戻し、1993 年に新しい王国として再出発しました。今では世界中から観光客が訪れているカンボジアですが、今回は本ツアーの中で訪問した 2 つの場所を紹介したいと思います。

○トゥール・スレン博物館（S21 収容所）

この博物館は元々高校の校舎でしたが、1975 年～79 年にかけて約 12,000 人～20,000 人の人々が当時のポル・ポト政権によって収容され、拷問を受けていた施設です。幅広い年齢の人々が収容された中で、自分と同じ年頃の子どもたちも亡くなりました。ポル・ポト政権は主に知識人をターゲットにしましたが、実際にはメガネをかけている人、カンボジアの伝統的なダンスであるアプサラダンスを踊れる人など関係のない人々も強制的に収容所に連れて行かれ拷問を受けていました。私がここで聞いて驚いたのは、大人だけでなく子どもも拷問をさせられていたということです。ポル・ポト政権はまだ知識のない子どもを洗脳し、拷問をさせていたそうです。

○キリングフィールド

カンボジアにはキリングフィールドと呼ばれる、ポルポト政権による虐殺の舞台となった場所がおおよそ 300 ヶ所あります。その中の 1 つであるチュンエク大量虐殺センターを訪問しました。

入場してすぐのところにある慰霊塔には、殺害された人々の頭蓋骨があり、虐殺の事実を直接感じることができました。また、実際に収容された人々が殺害された場所や、殺害された人が着ていた衣服などが展示されています。



頭蓋骨が安置されている慰霊塔

【ツアーの感想】

今回のスタディツアーで私は、カンボジアという国の歴史、文化、そして人々の生活について多くを学びました。訪れた場所の一つひとつが、カンボジアの過去と現在、そして未来について考える大切なきっかけを与えてくれました。

まず、日本大使館や UNESCO プノンペン事務所、日本ユネスコ協会連盟のカンボジア事務所では、国際的な協力や支援の重要性を強く感じました。また、カンボジアは過去に大きな苦しみを経験しましたが、今では教育や文化遺産の保護を通じて再生への道を歩んでいることを知りました。教育支援や子どもたちの学びの場づくりが、未来のカンボジアを作っていくのだと思いました。加えて、ツールスレン博物館とキリングフィールドでは、言葉を失うような強い衝撃を受けました。ポル・ポト政権の時代に多くの人々が犠牲になった歴史を知り、人間が人間に対してここまで残酷なことをしてしまうという現実を突きつけられました。その場に立つと、悲しみと同時に「二度と同じことを繰り返してはいけない」という強い思いが生まれました。平和の大切さを心から実感できる場所でした。

また、寺子屋では子どもたちの笑顔と学ぶ姿に心を打たれました。決して豊かな環境ではない中でも、一生懸命に勉強する子どもたちの姿はとても輝いていました。教育を受けられることが 当たり前ではないことを実感し、自分が日々どれほど恵まれているかに気づかされました。そして「学ぶことの力」が、未来を変える大きな希望であることを確信しました。このツアーを通して私は、カンボジアの悲しい歴史と、それを乗り越えて前に進もうとする人々の強さを学びました。同時に、国際協力や教育の力がいかに大切であるかを深く理解しました。さらに、今回のツアーで自分の視野や常識が大きく変わったと思います。私たちとは違う生活を送り、異なるバックグラウンドを持つ人々との交流を通して深く考えさせられることもありました。今回の経験を自分の中だけで終わらせるのではなく、日本に帰ってから周りの人たちに伝え、平和や教育の大切さを考えるきっかけを作っていきたいです。

【今後について】

カンボジアで見て、聞いて、感じたことは、私にとって大きな財産になりました。しかし、この経験を「思い出」として心の中にとどめておくだけでは、本当の意味で学んだことを生かすことにはならないと感じています。だからこそ、これから私は自分にできる形で行動に移していきたいと思います。

まず、学校での活動についてです。ツールスレン博物館やキリングフィールドで学んだことは、日本の多くの人にとって遠い存在の歴史かもしれません。しかし「人間が人間に対して残酷なことをしてしまう」という現実、決して他人事ではありません。そのため、私は学校での発表やレポートを通じて、自分が見たことをわかりやすく伝えたいと思います。写真や体験談を交えることで、同じ世代の友人たちにも少しでも心に残るような形にしたいです。また、学級活動や総合学習の時間に「平和」や「教育」について意見交換をする場を作り、カンボジアでの経験を話題のひとつとして共有することも考えています。

次に、地域でできる活動についてです。私たちは普段、募金やボランティア活動に参加する機会があります。今回、寺子屋で勉強する子どもたちの姿を見て、募金や支援が確かに「未来を変える力」になっていることを実感しました。これからは、学校や地域で行われる募金活動に積極的に参加するだけでなく、自分でも発信して周りの人を巻き込んでいきたいです。たとえば SNS や学校新聞に「カンボジアで見てきたこと」を載せ、協力を呼びかけることも一つの方法だと思います。小さな行動でも、積み重ねることで大きな力になると信じています。

最後に、私がこのツアーで学んだ最も大きなことは「知ることが第一歩」であるということです。悲しい歴史を知ること、子どもたちの笑顔を知ること、国際社会の取り組みを知ること。これらの「知ること」が、自分を変え、そして周りの人を動かす力になると信じています。これからもカンボジアで得た経験を生かし、平和と教育の大切さを伝えながら、自分にできる小さな行動を続けていきたいです。



寺子屋の子どもたちとの記念写真